

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 水稻

発行日 平成27年 6月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆6月15日調査の結果、県全体の水稻生育は平年より2日程度進んでいます。
- ◆すでに目標茎数(20~30本/株程度)を確保した圃場では、すみやかに中干しを行いましょう。
- ◆これから、幼穂形成期や減数分裂期など低温に弱い時期を迎えます。幼穂形成期頃から徐々に深水管理に向けた水管理を行いましょう。
- ◆いもち病の感染に好適な気象条件となっています。圃場をよく観察して葉いもち発生に注意しましょう。

1 生育概況

6月15日に各農業改良普及センターが実施した水稻の一斉生育調査(22カ所、延べ33品種)の結果、県全体の生育は、草丈29.7cmで平年より0.4cm短く、茎数は291本/㎡で平年より多い(平年比120%)。葉数は7.3葉で平年を0.3葉上回っているなど、水稻生育は平年より2日程度進んでいます。

表1 平成27年生育診断圃の地域別集計表(6月15日現在)各農業改良普及センター調べ

地帯名	草丈			茎数			葉数		
	本年 (cm)	平年 (cm)	平年差 (cm)	本年 (本/㎡)	平年 (本/㎡)	平年比 (%)	本年 (枚)	平年 (枚)	平年差 (枚)
北上川上流	27.4	30.8	-3.4	213	197	110	6.8	6.6	0.2
北上川下流	30.5	30.0	0.5	317	259	123	7.5	7.2	0.3
東 部	29.9	28.1	1.8	344	237	143	7.2	7.0	0.2
北 部	29.5	30.2	-0.7	249	220	115	6.7	6.3	0.4
全 県	29.7	30.1	-0.4	291	242	120	7.3	7.0	0.3

注：平年値は原則として平成22年から26年までの5か年の平均値を用いた。

表2 平成27年生育診断圃の品種別集計表(6月15日現在)各農業改良普及センター調べ

品種名	草丈			茎数			葉数		
	本年 (cm)	平年 (cm)	平年差 (cm)	本年 (本/㎡)	平年 (本/㎡)	平年比 (%)	本年 (枚)	平年 (枚)	平年差 (枚)
いわてっこ	29.5	30.6	-1.1	233	202	117	6.6	6.2	0.3
あきたこまち	27.3	28.7	-1.3	250	202	124	6.9	6.7	0.2
どんぴしゃり	29.6	30.7	-1.1	343	257	131	7.4	7.2	0.2
ひとめぼれ	31.4	30.1	1.3	332	275	120	7.8	7.5	0.3

注：平年値は原則として平成22年から26年までの5か年の平均値を用いた。

2 中干しの徹底で根の健全化（茎数を確保した圃場）

目標となる茎数（株あたり概ね20～30本）に達したところでは「中干し」を行いましょう。茎数がまだ不足している圃場では、浅水管理を継続し、分げつの発生を促しましょう。

中干しの効果

- ◇ 土壌の還元化をやわらげる→根の伸長促進・健全化
- ◇ 無効分げつの発生を抑える
- ◇ 地耐力の向上→秋作業の容易化

- 中干しは、田面に小さな亀裂が生じ、軽く踏んで足跡がつく程度が目安。（7～10日間程度）
- 中干しと同時に溝切りをしましょう。排水を容易にし、収穫時の地耐力を高めます。
- 中干し後、一度に深水にすると酸素不足となり根に障害が出る場合がありますので、中干し直後は間断かんがいとし、その後常時湛水としてください。

3 冷害回避のための水管理

東北地方の1カ月予報（仙台管区气象台、6月25日発表）によると、向こう1カ月は平年と同様に曇りや雨の日が多く、向こう1カ月の降水量は多い確率が40%、平年並の確率が30%です。日照時間は少ない確率が40%、平年並の確率が30%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並の確率50%です。

これから水稲は低温に弱い時期を迎えます。図1を参考に気象条件にあわせた水管理を行って冷害を回避しましょう。

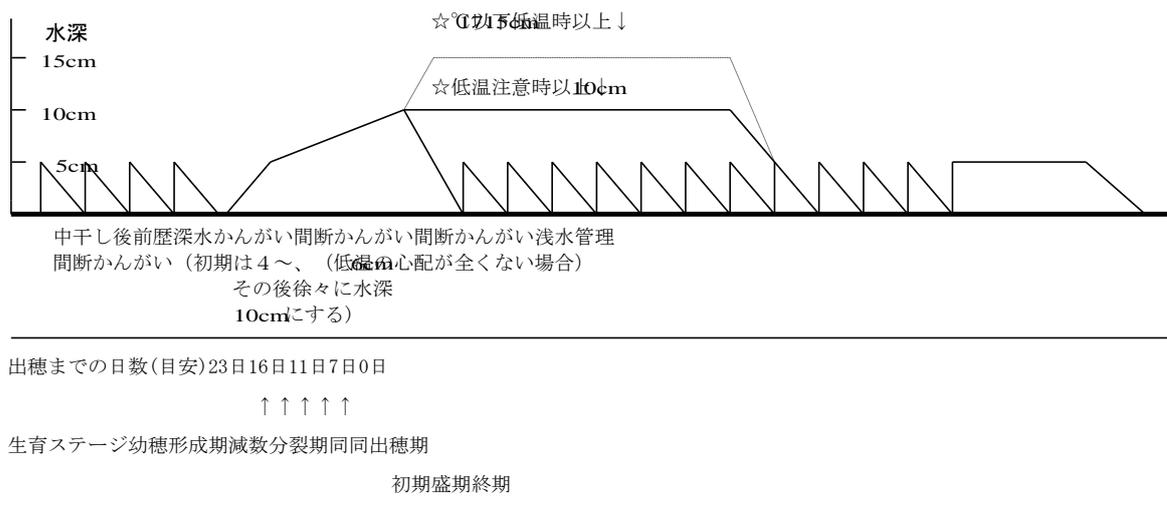


図1 中干し後の水管理の模式図

■ 幼穂形成期前後（前歴深水かんがい）

現在の生育は平年並～やや進んでおり、幼穂形成期も平年並には迎えると予測されます。幼穂形成期の数日前から入水して幼穂形成期には4～6cmの深水にします(前歴深水かんがい)。幼穂を保護することで小孢子（花粉のもと）の分化が促進され、障害不稔を軽減できます。

※ 平年の幼穂形成期

いわてっこ：7月10日頃、 あきたこまち・ひとめぼれ：7月15日頃

■ 減数分裂期前後（深水管理の実施）

少しでも低温が予想される場合は、幼穂形成期の深水管理に引き続き、10cm以上の水深を確保してください。

17°C以下の低温が予想される場合は、15cm以上の深水としてください。

4 追肥

今後の追肥判断のためにも葉色の変化に注意が必要です。良食味米生産の観点から、品種、気象・生育状況をみきわめて、適期に適量を施用しましょう。詳しくは各地域で発行される技術情報等を参考にしてください。

5 いもち病防除

(1) 葉いもち

既に取置苗での発病が確認され、本田での発病が確認された圃場も見られます。また、いもち病の感染に好適な気象条件も継続的に出現しています。

いもち病は、気象条件により急激に広まるので、圃場の観察と早期防除を徹底してください。

圃場をよく観察し、発生を確認したら、葉いもち予防粒剤（箱施用剤、水面・投げ込み施用剤）施用の有無にかかわらず、直ちに茎葉散布を実施しましょう。

(2) 穂いもち

穂いもち対象の予防粒剤を散布する場合は、次の点に留意してください。

- ・ 水稻の生育状況に注意する（散布時期を逸しない）
- ・ 圃場をよく見回り、葉いもちが発生していたら直ちに茎葉散布してから粒剤施用する。
- ・ QoI剤（嵐剤、オリブライト剤、アミスターエイト）は耐性菌の発生リスクが高いため、嵐剤を箱施用した場合は、オリブライト剤およびアミスターエイトを本田では使用しない。

6 斑点米カメムシ類の防除対策

病害虫防除所が実施した6月中旬の調査では、本年も畦畔や転作牧草のイネ科植物で斑点米カメムシ類が確認されています。

以下により、カメムシ類の増殖源となる畦畔等のイネ科植物の管理を徹底してください。

なお、養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する計画がある場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努めてください。

■ 畦畔や転作牧草等のイネ科植物が発生源

斑点米の発生原因となるカメムシ類（アカスジカシカメ等）は、畦畔や転作牧草等のイネ科植物で繁殖します。

■ 水稻出穂の15～10日前までに地域一斉に草刈りを実施

畦畔雑草は水稻が出穂する15～10日前までに地域で一斉に刈り取ってください。

■ 水田内の雑草も増殖源となる

水田内にノビエ・ホタルイ・シズイ等が多発している圃場では、これらがカメムシの発生源となりますので、水田内の除草に努めてください。



図2 シズイの花穂とアカスジカシカメ成虫



図3 畦畔雑草管理は地域一斉に

7 直播栽培（鉄コーティング種子による湛水表面播種栽培）の本田管理

直播栽培は、移植に比べて生育量が小さくても茎数過剰になりがちです。

圃場を良く確認し、目標となる茎数（株あたり概ね20～30本）に達したら直ちに「中干し」を行い、株支持力および地耐力の確保に努め、倒伏の軽減につなげましょう。

（1）病虫害防除

粒剤の水面施用または茎葉散布による防除が基本となります。

散布する薬剤の選択は、岩手県農作物病虫害・雑草防除指針（移植栽培）を参考としますが、飼料用米や稲発酵粗飼料（稲WC S）では、農薬の使用に制限がありますので、農業改良普及センター等に確認のうえ使用してください。

ア いもち病防除

（ア）葉いもち

葉いもち対象の予防粒剤は、葉いもちの発生を見てからの散布では効果が劣りますので、防除時期（初発の10日前：6月20日～25日）に注意するとともに、散布前に発生を確認した場合は、直ちに茎葉散布を行いましょう。予防粒剤を水面施用した圃場では、7月20日頃（初発が早い場合や多発年は7月15日頃）から本田を巡回し、発生が目立つ場合は直ちに茎葉散布を行います。

（イ）穂いもち

予防粒剤の水面施用（出穂20～10日前頃）、または出穂直前と穂揃い期の2回の茎葉散布を基本とします。

イ イチモンジセセリ（イネツトムシ）

飛来性の害虫で、本県での発生は例年少ないものの、生育後半に葉色が濃い場合は、大きな被害を受ける場合があります。圃場観察を十分に行い注意しましょう。

ウ 斑点米カメムシ類

移植栽培の項（6）に準じます。

（2）穂肥について

穂肥の要否は、移植栽培に準じて判断します。

直播栽培（表面播種）は、移植やカルパー土中播種に比べて倒伏しやすいので、取組1～2年目の慣れないうちは窒素成分量を基準より控えめに対応し、様子を見ながら翌年以降は適宜、加減しましょう（特に耐倒伏性が弱い（「ひとめぼれ」「あきたこまち」「いわてっこ」等））。

なお、移植栽培に比べて明らかに生育過剰と判断される場合は、倒伏軽減剤の使用も検討しましょう。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

今回の発行予定日は7月30日（木）です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しています。発行年月日を確認のうえ、最新の情報をご利用ください。

中央農業改良普及センター・地域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。